

## 四国を愛した大平さん

山口 恒 則

昭和二十七年、大平さんは、初めて総選挙に出馬され見事に初陣を飾って、政治家としての輝かしい第一歩を踏み出された。

ちょうどこの年、私は、三年半にわたる東京での電気事業経営者会議の仕事を終えて、四国電力本店に帰ってきた。

郷土愛の人一倍強かった大平さんは、政治家となられてからも郷土香川のために随分力を尽くされ、私にも変わらぬお付き合いをいただいた。

昭和二十八年当時、たまたま私は丸亀市に労災病院をつくろうという計画に参画し、中央への陳情に腐心していたのであるが、新進気鋭の国会議員であった大平さんは、私を伴って労働省や厚生省に熱心に足を運んで下さり、この計画を成功させてもらった。

こうしたことが機縁となつて、大平さんが高松に帰られたときには、常宿にされていたホテル川六へおうかがいするようになったが、おかげで、大平さんの幅広く格調の高いお話を拝聴する機会に恵まれた。

ある時、大平さんは、「高松高商を卒業する際、四国水力電気への入社を考えたが、不況のため新規採用が見送られ、とうとう就職の機会を失ってしまった」と話しておられたが、もし、この年の不況がなければ、私たちは、同じ職場で机を並べる間柄になっていたかも知れない。

というのは、四国水力電気は、私の入社した伊予鉄道電気と同様、やがて電力の国家統制の時代から電力再編成を経て、現在の四国電力へと引き継がれてきたからである。

もちろん、その場合には、宰相としての大平さんは存在しないわけで、人の世のさだめの不思議さに深い感慨を覚える。

大平さんは、若くしてキリスト教に入信され、さらには熱心な読書家であったことから、実に立派な人生哲学、政治哲学を身につけておられ、語られる言葉の一つ一つが極めて感銘の深いものばかりであった。

今も私の身近に、

「盡凡心開天地」

「水深川静」

という、大平さんの色紙があるが、このいずれの言葉にも、見栄を張らないなかに天下国家の大計を秘めておられた大平さんのお人柄と高邁な思想が滲み出ているように思われる。

大平さんは、四国から日本、さらには世界へと大きくはばたかれたが、私は、四国を愛し四国のために尽くされた大平さんの理想に一步でも近づくことのできるよう、大平さんの思想を深く噛みしめ、凡心をつくして、四国の開発に努めたいと願っている。

(四国電力社長)